くにみ

No. 184

1973／1／15

編集発行 国見町公民館

人口と世帯数	
男	5,873人
女	6,130人
計	12,003人
世帯数	2,684世帯

48.1.1 現在

新春雑感

公民館長 佐藤善次郎

―小住為佳―

日中国交が回復されてから最近は、中国を旅行される人がたいへん多くなったそうですが、特に中国の山中の茶店や、峠の茶屋などで「小住為佳」と書いた幟様の旗を立てているのが、よく見うけられるそうです。小住為佳とは「小小とどまる佳と為す」と読むべきでしょう、つまり日本風に言えば「ここらで一寸一服する、よろしいある」となります。つまり客引の文句を書いた旗なのです。そして言外に「何もそう急いで、いきを切らせて、せかせかと登ってゆかなくともいいでしょう。一寸一服つけて渋茶をすすりながら、あたりの景色を眺めたらいかがですか」と呼びかけているように思われます。そういたしますと、夢中で先を急いでいた時には、想像もしなかったような眺望が開けてくるものです。お正月は、暦年の一つのくぎりでしょうが、自分の人生の中でのオアシスに憩う時期とも考えてはいかがでしょうか。つまり一寸一服です。

そこには明日への飛躍の足がかりになる考えが浮かぶかもしれませんし、又反省する機会にもなるわけです。そうすることによって、安外よりよい生活の知恵が湧いてくるかもしれません。お正月をこんな風に解釈してはいかがでしょうか。

―美知―

「月日は百代の過客にして、ゆきかう年もまた旅人なり」これはあまりにも有名な芭蕉の奥の細道の書き出しの名文ですが、人間の一生を旅にたとえ、月日のたつのを水の流れにたとえた文章は、古今数多く見うけられます。「旅」と「道」はつきものです。魯人は「もともと地上には道はない歩く人が多ければ道になる」と言っております新しい道を開いてゆく人もなければなりませんし、後からその道の幅員をひろげ、修繕してゆく人もなければなりません。つねに時代に適応した道にせねばなりませんわが国も今までは経済成長の一本道でしたが現在は人間の福祉優先の道になっております。

わが国では、古くは道を「美知」と書いたそうですが、本来なら美知ではなく「未知」と書くべきでしょうが、敢えて「美知」と書いた上古の日本人の心情のこまやかさが嬉しくなります。「旅」つまり人生の楽しさは、「美知」への憧れであり、それに到達するための努力でもあるわけです。逆の言い方をすれば「美知」の歩みを旅のたのしみと言えましょう。

道は遠かれ近かれ、どこでも通じ、誰でもその上を歩むことができますが、その歩む人によってどうにも表情を変える面白さをもつものです。人生の裏にも道はありますが、それはわれわれの歩む道ではありません。表街道を堂々と歩みたいものです。

激動する七十年代の第四年目の昭和四十八年の新春を迎え、ひたすらわが歩む道に誤りなからんことを祈念するものであります。

〝さあシーズンです〟 スキー教室へどうぞ

町体育協会と公民館共催によるスキー教室を今シーズンは次のとおり開催いたします。ふるってご参加ください。

一、一月二十八日（日）
吾妻スキー場（高湯）
会費一人一、〇〇〇円
二、二月十八日（日）
スキーレクリエーション大会
小坂スキー場　会費無料
午前十時現地集合、
三、三月四日（日）
天元台スキー場
会費一人一、〇〇〇円
四、三月十八日（日）
山形蔵王スキー場
会費一人一、五〇〇円
〇参加希望者は各回とも当日の五日前まで公民館に直接または電話で申し込み、当日は午前六時三十分まで（山形蔵王は六時）役場前に集合してください。

ベストセラーズ展示会

戦後四分の一世紀を経過した今日、それぞれの時代によく読まれたベストセラーズをふり返って見て、図書の歴史をたどりあわせてその時代の社会的背景等を思い起すことも意義あることと思い、左記により展示会を開きますので多数ご来場くださるようお待ちしております。

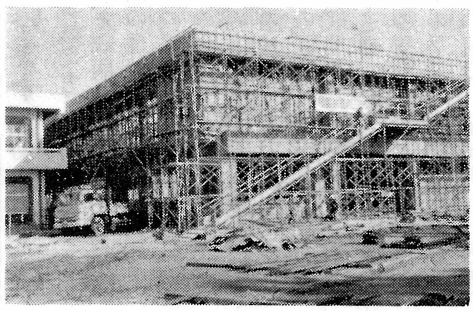
一、日時　二月三日（土）四日（日）午前八時三十分～午後五時まで
二、会場　町民福祉センター
三、展示図書　昭和二十一年「施風二十年」から昭和四十七年「恍惚の人」まで約二〇〇冊をパネル、解説等を加えて展示します。

順調に進む 待望の町民体育館工事

昨年十月に着工町民体育館は観月台公園の一角、町民福祉センターの地つづきに着々と進められております。この体育館は総面積約一、三七四㎡（四一七坪）、総工費六千万円で当町としては勢いっぱいの事業といえましょう。

専門家が見れば多少の不満があるかもしれませんがこれまで踏切った町当局と町議会の皆さんに、衷心から感謝と敬意を表します。

急激に変ぼうする時代における体力づくり運動の殿堂として、竣工が待たれます。



町史（第一巻）今秋おめみえ

お家の宝として各戸一部を……

国見町発足二〇周年記念事業の一環として計画された町史編纂の仕事も、担当者のたゆまぬ努力と町民各位の密接な協力によって順調に進み、この秋（十月一日の予定）そのうち第一巻として、資料編(1)が出版される見とおしとなった。

初めの計画では資料編と通史編の二冊で一部とする考えであったが遺跡の発掘や古文書の調査を進めた結果、他町村にはあまり例を見ない貴重な資料が多数あることがわかり、せっかく発見されたこれらの資料をなるべく豊富に登載して資料価値を高めるため資料編を二冊にし、通史編一冊を合せて三冊組とする。従って歴史的価値は倍加し、この種の地方史としてはあまり類例のない町史になることがわかったので。

子孫の為にお家の宝として各戸一部を備えることはもちろん、現在他市町村で暮している町出身の方々にも購入していただきたいとのこと。

町史編纂室では近くPR紙をつくり、町内外から予約をとり、印刷にかかることになるが、あくまでも予約制による限定出版で、追加出版はしないので、希望者はなるべく早く注文してもらいたいといっている。

尚値段は一冊二五〇〇円になりそうだが町で一千円の補助をし希望者には一千五百円で頒布する予定。

よろしくお願いします（役場で人事異動）

昨年四月新設された企画室は室長に助役が兼務しておりましたが助役の退任により空席となりました。

また昨年九月板橋税務課長が退職、空席となっておりましたがそれぞれ次のとおり異動がありましたのでお知らせいたします。

新企画室長心得　赤坂　正勝

新税務課長心得　渡部　直人

児童手当制度についてのお知らせ

児童を養育している人に児童手当を支給することによって、児童育成の場である家庭生活の安定と、次代の社会をになう児童の健全育成と資質の向上をはかることを目的とした制度です

◉支給を受けられる人

手当の額

十八歳未満の児童を三人以上養育している人に対して、三人目以降の児童で、義務教育終了前のものについて月額三千円の児童手当が支給されます。

ただし、養育している人に高額の所得がある場合は支給されません。

（昭和四十七年度は扶養親族四人で前年の所得が一、五〇六千円以上の場合は支給されません）

なお支給の対象となる三人目以降の児童は段階的に拡大されます。

昭和47年1月から昭和48年3月まで↓昭和42年1月2日以後に生れた児童（5才未満）

昭和48年4月から昭和49年3月まで↓昭和38年4月2日以後に生れた児童（10才未満）

昭和49年4月以降↓義務教育終了前の児童

◉支給を受ける方法

該当される方は印かん持参の上、役場住民課福祉係に認定の請求をしてください。認定されれば毎年二・六・十月の三回に分けて、それぞれ前月までの手当をまとめて、町から支払われます。

なお公務員については国、県、町、三公社において直接認定及び支給が行われます。

≪町奨学生募集≫

昭和四十八年度町奨学生を次の通り募集いたします

一、修学資金

①人員若干名

②貸与期間は高校、高専、大学それぞれの最短修業期間

③貸与月額　高校一、五〇〇円　高専二、〇〇〇円　大学五、〇〇〇円

二、入学支度金

①人員―高校（高専）十四名　大学六名

②貸与額―高校（高専）三万円以内　大学十万円以内

○申込みは一月三十一日まで、くわしくは町教育委員会にお問い合わせください

おめでとうございます

（十二月中出生届をされた方　敬称略す）

出生日	氏名	親名と続柄	住所
11、19	徳江　恵美	吉郎の長女	山崎　滝山8
25	佐藤　昭文	昭元の長男	西大枝牛沢21
28	安達　忠美	義美の3男	山崎　北古舘8
30	朽木　智視	硯也の2男	泉田　堰下39の1
12、1	渋谷　正博	正志の長男	光明寺沼16の5
1	目黒　和弘	和夫の長男	泉田　普蔵42
2	渡辺　城路	準四郎長男	藤田　沢田二23
6	中山　秀貴	勉の2男	光明寺鹿野山3の3
6	赤間美由紀	良昭の長女	大木戸高橋4
7	宍戸　裕二	洋平の2男	山崎　小舘脇8
7	秋場　文江	昌蔵の長女	藤田町尻二8の7
7	高橋　一徳	一吉の長男	貝田　山の神前49
8	東海林正尚	一樹の長男	藤田　南27
10	高原　恭子	進の2女	小坂　小坂47の1
10	鈴木　美恵	秋正の長女	川内三百地37の2
11	鶴崎亜紀子	孝治の長女	山崎　中川前18
13	斎藤　博儀	博の2男	徳江　北古屋10
13	渡辺　由美	一の長女	徳江　団扇3の1
14	高村　正基	正吉の長男	高城　南畑25
14	安積ひろみ	貞夫の長女	泉田　八島23の2
15	八巻理加子	照夫の長女	徳江　下川原4
17	斎藤　里史	次男の長男	徳江北小屋26の1
18	松浦富由子	敏雄の長女	石母田唐松6
19	八巻　尚洋	隆一の長男	徳江　拾俵橋20
19	小林　麻美	喜勝の長女	西大枝原町31
20	徳江　成子	勝美の長女	山崎　滝山8
22	熊坂　千尋	文雄の長女	内谷　東脇15

早目にお願いします

最近一部の方々から、し尿汲取りをたのんでもなかなかきてくれないと苦情がでております。

汲取業者には一日の運搬台数に制限がありますので早目に申し込みくださるよう、ご協力をお願いいたします。

（住民課保健係より）

報告
東南アジア見たまま
第六回青年の船団員

石母田　佐藤　秀世

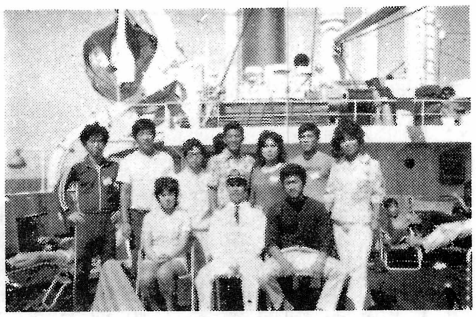
ジャカルタ着は十月二十八日である。ジャカルタの港が近ずくにつれ、コバルトブルーの熱帯の海に浮かぶ奇妙な帆船が目につく。漁船だということである。強い陽射し、静かな海、帆船、それらのものが船旅の僕達にインドネシア情緒を感じさせる。のどかである眠くなるほど。……

ジャカルタで見学したところでは郊外のボゴール植物園、農業研究所、市街地等が主なところである。

ボゴール植物園は東洋一の視模を有するといわれ、園内には大統領官邸もあるその官邸は赤い屋根に白壁の美しい建物であるが、それはオランダ支配下にあった時代からのものだということである。農業研究所には、日本からの技術援助による設備が多く日本人技師も研究に当っていた。インドネシアは農業国でありながら技術水準は非常に低く技術指導員も六千ヘクタールに一名ぐらいの割合でしかいないと言うことであるジャカルタ市内は整然と美しい建物が並ぶところもあれば、毎晩殺人があるというようなスラム化したところもあり、セブ同様貧富の差大きく、全体的な生活水準も極めて低い。しかし「バナナ三本あれば飢えることなしインドネシア」と言う言葉は職のない人々をも最低限生かし得るだけの豊かな自然環境をもの語っているのだろう。

ジャカルタの次は、文字通り全く毛色の違う世界、白人社会のオーストラリヤはメルボルンとシドニイである。インド洋の荒波にもまれ、船酔いに苦しめられた十日間の航海の後にまっていたのは、古いヨーロッパの情緒を今にとどめつつも、近代的ビルラッシュの街メルボルンであった。ここは映画や写真で見たヨーロッパの延長と言う感じである。ビル街を行き来する白人達、誰も僕達に注意をはらわない。セブやジャカルタとはまるで違う。お互いに干渉しあわない個人主義のお国振りの現れであろう。

僕はメルボルン郊外の牧場地帯に民宿する機会を得た。小学校の先生のお宅であったが西部劇に出てくるようなあたり一面緑の牧場の中にある家で、僕はそこで始めて自分が日本から遥かに離れた場所に居るのだと言う実感を持った。羊の背に乗った国と言われるオーストラリア、その牧場のまっ唯中の家庭での食事どき、大味な羊の肉にかぶりつき窓から外の牧場の景色を眺めつつ、アメリカの西部開拓者達の情感もかくあったかと言う気持になったものである。



シドニイは世界三大美港に数えられるだけあって、大変美しい港街である。入りくんだ海岸線、水の美しさ、緑の中の赤い屋根の家なみ、すべてが美しい調和を保っている。

オーストラリアを後にし次は最後の訪問国ニュージーランドで第一の寄港地は首都ウエリントンである。ウエリントンは首都でありながら人口僅か十六万、福島より小さな静かな街である。背後に丘陵がせまり、丘の上には広大な植物園があり市民の憩の場になっており、オーストラリア同様自然を大切にする国民性が偲ばれた。

ウエリントンから第二の寄港地オークランドまで僕を含む、全団員の半分が、二泊三日でバスによる陸路旅行をした。南半球は春の季節。ゆけどもゆけども続く羊牧場の美しさ、日本に似た火山国、起伏に富んだ地形に目をうばわれる。国土面積が日本の七割、人口が僅か三百万と言うニュージーランドの広さは、その国民性に大きく影響し、おおらかでスローペースの人ばかりだと言うことである原住民のマリオ族によるダンスショーなども見ることができたが、北海道のアイヌ同様、この国の観光の主役となっているようだった。オーストラリアとニュージーランドを通じ最も印象に残ったものは、大規模な牧畜と全体的に高度で貧富の差のない生活水準、個人主義的でいかにも人生を楽しんでいると言う感じの、のんびりした国民性などである。

十一月三十日、すべての公式訪問を終えた青年の船はオークランドを後に帰路東京へと向かうが、途中補給のためラバウルへ一日だけ寄港する。ラバウルは大平洋戦争中日本軍の基地があったところで、戦後二十七年経た今もなお、市内やヤシ林の中に戦車や飛行機の残骸が風雨にさらされて残っている。ここでは日本の商社員に会い各所を案内してもらう。今までのすべての寄港地で日本の企業の進出を見たが、自動車などの日本製品を見るにつけ、日本経済の海外進出を感じさせられた。

十二月十四日、二ケ月間の旅が冬枯れの晴海で終結した。駆け足旅行で断片的な経験しか残らなかっが、感じたこと考えたことは多かった。特に僕らの国日本を外からながめたと言うことが、最も意味のあること、だろう。

日本がいかに物質的に豊かであるか、セブやジャカルタはもちろん、オーストラリアやニュージーランドでさえそれは充分感じられた。そして又、日本がいかに忙しく精神的ゆとりのない国であるかと言うことも同時に感じとることができた。どこの国民が最も幸福度が高いかと言う問に対して一概には何とも答えられない。しかしGNP世界二位の日本をまっ先にあげることができないと言う事実またセブやジャカルタのスラムに住むような人々に不幸の影を観なかったと言う事実これらは僕らの前途を決める上で鍵ともなるものではないか。そして又訪問国はすべて国教とも言うべき普遍的な宗教を有していたが、我国にはそれに当るものがないと言う事実も、人間の幸福観の微妙さ、不思議さを見事にもの語っているのではないかと思うのは僕だけであろうか。

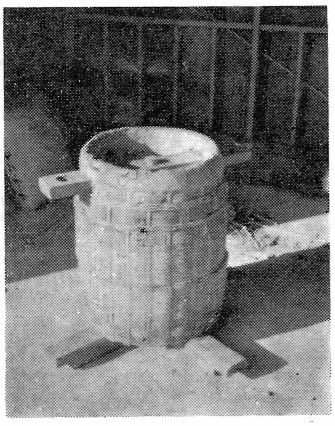
お悔み申し上げます

（十二月中に亡くなられた方　敬称略す）

死亡日	氏名	年令	住所
12、2	佐久間謙二郎	69	森山　薬師東19
3	渋谷　正博	1	光明寺沼16の5
5	鈴木　幸吉	77	川内　西18
14	浅野　義雄	61	山崎　滝山3
19	大竹カメヨ	63	藤田　堤下12
21	後藤　マサ	81	高城　三川21
21	高橋　喜蔵	90	山崎　山畑4の2
24	佐々木金蔵	74	石母田樋口43
29	後藤　せつ	93	川内　柳原26

これなァーに？
―消えゆく民俗資料―

わたくしたちの祖先が生活や生産に使った道具類で捨て去られ、忘れ去られたものがたくさんあります。この写真をみて「すりうす」「土ずるす」と答えられる人は何人いるでしょう。祖先たちが長い年月にわたり、汗と涙を注ぎ、ときには血までふりかけてきた、忘れることのできない民俗資料です。



明治学級だより

十二月の学習

年の瀬もおしせまり、町にはジングルベルの鳴りひびく二十二日（金）、いつものように老人子ども室はぢいちやん、ばあちやんでいつぱい。きょうも何かをつかんで帰ろうとみんなはりきっている。

午前十時十五分、熊田委員長の開会のあいさつ。つづいて町史編纂室の鈴木嘱託の「国見町の文化財」についての話で午前の部を終り、みんなで楽しい昼食の後、午後一時からは双葉経営伝習農場長根本重右ェ門先生の「列島改造と農業の将来」についてのお話があり、午後三時半閉会。出席者数一三〇名

今月の学習

厳寒中のとしより集めは遠慮せよとか、一月中ぐらいは無理をしないで休めというありがたい忠告は毎年きかれるが、元気なわれわれはじっとしていられないから寒暑にかかわらずやろうという勇ましいかけ声が勝ちを制して、ことしも大寒中にやることにした。（どうぞ無理をしないでください）今月はお正月らしく楽しい勉強をする。

まず、若い人の海外旅行の話をきいて若返り、平和太郎の実演を見て楽しむというだんどり。なお、みんなのかくし芸など持ち寄って虫干しするのも妙案、とにかくみんな元気で、友達誘い合い出席しましょう。

列島改造と農村の将来
―根本先生にきく―

十二月の明治学級に、双葉郡からわざわざおいでくださった根本先生は、約二時間にわたって熱弁を振い今、わが国を大きくゆり動かしている「列島改造論」についてわかりやすく説明し、それがわれわれ農村にどうあらわれていくのかということについてくわしく話をされた。その結論として農村の快適な環境づくりについて述べられたことを略記してご参考に供する。

これまで行われてきた農業構造改善事業は、農業経営の規模拡大や基盤整備など生産中心に進められてきたが、これからは更に農村の環境整備を主として、都市に比べ立ちおくれている農村部の生活環境を整備し高福祉農村をつくる。その具体的な事業として次のようなことを挙げている。

集落内の中小河川の改修
排水設備
農村道路の整備
上下水道
圃場整備
共同集会施設
農村生活センター
農村公園
じん介処理場
共同休養娯楽センター
危険物集中管理所
共同墓地の建設
人造肥料製造施設

尚この事業の進め方等についてのくわしい印刷物をいただいたのでお読みいただきたい。（鈴木記）

平和太郎も来る
今月の明治学級

左記により新年第一回の学習会を開きます。みんな誘い合っておいで下さい。

一、とき　一月二十五日（木）午前十時～午後三時（午前九時半受付開始）
二、ところ　町民福祉センター
三、内容
1、開会午前十時（時間励行）
2、東南アジヤ方面旅行おみやげ話　第六回青年の船団員佐藤秀世君（石母田青年会）
3、新年のあいさつ町長佐藤善右ェ門殿（昼食―各自持参）
4、平和太郎実演……腹話術、奇術、など　飯坂町湯野清野市次殿
5、学芸会……みんな奮って出演
各方部二～五種目準備

◉佐藤秀世君は第六回青年の船団員として昨年十月十六日から十二月十四日まで約二か月間、フイリツピン、ジヤワ、豪州、ニュージランド、ラバウル各地を視察して来た。若い人から見た外国の話スライドなどもたくさん用意されている。大いに期待してよいと思う。（本紙三頁参照）

あつかし俳句会（十二月十六日）

兼題「もがり笛」「枯野」　席題「枇杷の花」

＊もがり笛隣へ遠し回覧板　早田　灰鳥
＊美しき人の訃を聞くもがり笛　奥山　甲二
＊童話聞く児等の瞳光るもがり笛　斎藤黄鶴楼
＊新興地ところどころの小枯野　一陽
＊枇杷の花去りかねている立話　勝ェ
＊観光バスガイド語らず枯野原　正一
＊何一つ思ふことなし枯野原　痴仏
＊住み古りし窓薄暗くもがり笛　雨田
＊空青く枯野の果てに蔵王座す　山月
＊振り向いて枯野の果の故郷哉　鳶水
＊兄弟の墓所は遠き枯野かな　泰山
＊枯野行く出稼びとの服厚く　亭司
＊黒雲の恐竜に似てもがり笛　はる子
＊浪人の子は未だ寐ずもがり笛　貞子
＊ふる里の枯野に高き工事板　昭子
＊もがり笛心にかかる星占い　えい
＊頼りなき心叱りて枯野行く　秋子
＊親に受けず子にまた遺さず枯野道　栄子